

## 国府宮はだか祭

国府宮とは愛知県稲沢市にある神社だ。

正式には尾張大国霊(たま)神社という。つい明治までは尾張とか三河とか美濃が国の概念であり、尾張国の御霊(みたま)を祀る神社であった。神社名からして我々はもはや奈良時代の



レイヤー(地層)に入っていく。楼門は足利時代、拝殿は徳川初期の建立と聞かし、境内に磐境(いわさか)と言って、そもそも原始宗教の時代は構築物を建てず、神が降りてくる岩や木を拝んでいた時代の名残を留める巨石がある。まずは、いかにも聖域と呼ぶに値するおごそかさと権威を感じさせる。

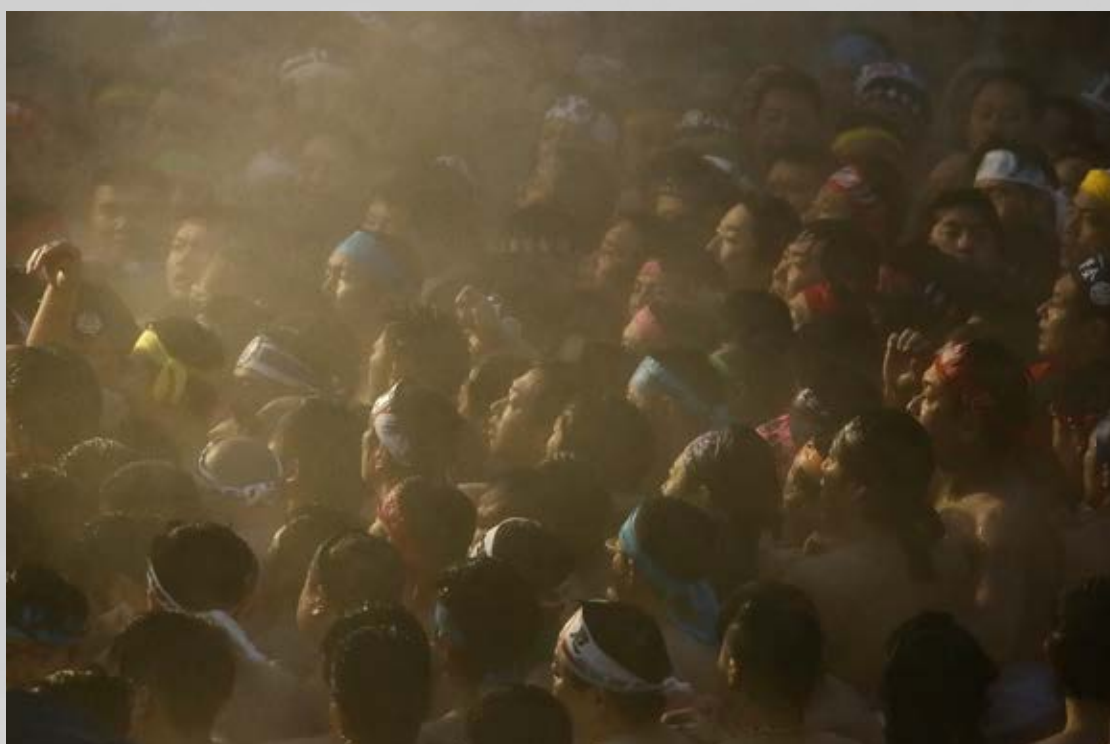
はだか祭は難追神事である。日本民族の原始宗教である神道は経典というものが無い。神様の姿は見えないし、教えも戒律も何もない。汚れを祓い、清める行為だけが貴い。その行為を行うのが祭であり、祭自体が信仰の伝道である。我々は祭を実践することによってのみ、柳田国男の言葉を借りると「飛び石のように」縄文の昔からの魂を受け継ぐ。

国府宮はだか祭は一人の神男の体に触れることによって難から逃れ、お祓いを受け、清められ、生命が蘇生するのだ。神男は公募によって募集し、くじ引きで決められる。問題はこの神男に触れようとして押しかける裸男たちの多さと心理状態にある。稲沢市の近郷近在から三千人余の裸男が参集する。私は若い頃3度裸男を経験した。旧暦正月にやるわけだから何せ寒い。しかも、薄い晒しの褌一丁だ。まず、一杯ひっかけなければとてもやってられない。だから初めから理性はほぼマヒしている。そういうアナーキーな裸の大集団が救済を求める宗教的な本能で、必死に神男めがけて押し寄せる。野性に目覚めたエネルギーがスパークする。



「何と野蛮な神事!」初体験時の直感だ。

裸男たちはそれぞれのサークルごと大型バスなどで来るが、神社の近所には宿と称して自宅を貸してそこで裸になって参加する者もある。国府宮神社のすぐ傍に先輩の県議会議員宅があり、かつて私はそこを宿に参加した。愛知県議会議長を務めた久保田英夫さんは私にこういった。「神男は押し寄せ渦巻く群衆に揉まれ二、三回失神するらしいぞ。踏み倒され、肋骨を折って死んだ奴もいる。選挙の候補者と似てる!」最後の一言が真に迫り、神男の心境をたちどころに理解した。



ドラマは昼ごろから前奏曲のように諸行事が進み、徐々に鼓動が高まっていく。夕闇が迫るころ、神男が裸の大集団に飛び込み、一瞬にして静から動に転ずる。神男を中心にし、神が憑依したように暴れ狂う裸男たちの巨大な渦は、別途組織された男たちが手桶から冷水をかけることによって乱れ、激しく揉み合いを繰り返し、神男は難追い殿に到達、結末を迎える。

国府宮はだか祭が終わると、春の風が吹いてくるのもいい。

